

マニュアルに従って分析・検討した。SCTの反応内容は、各タイプによって著しい相違が見られた。

I統合型は、自分の人生と育児の両者を意義あるものとして肯定的に受けとめ、主体的、積極的に関与していることが特徴的であった。さらに自分の人生と育児が調和しており、育児によって自分自身が成長してきたことや、育児が生きがいになっていることが明確に意識されていた。また、SCTの各刺激項目に対して、家族に対する記述が多く、夫を信頼し、高く評価していることが推察された。

II伝統的母親型は、自分の人生に対しては肯定的で満足しているが、I型と比較すると、現在の生活や将来に対する主体性はそれほど高くない。また、自分の人生に対する明確な意識や展望が乏しいことが特徴的であった。育児に対しては、子供の気持ちを大切にすよい母親であろうとする姿勢が4

タイプの中で最も強く、自己意識の中に占める子供の存在の大きさがうかがわれた。育児に対してはアンビバレントな反応も多いが、このタイプのアンビバレントな感情は、「大変だけれど楽しいもの」「夢いっぱいだが悩むことも多い」などの反応に示されているように、子育てにしっかりと関与し、積極的にとりくんでいることから体験されていた。これは、III独立的母親型の、「子育ては苦楽に満ちているが生きがいではない」というような、育児への関与の浅さからくる気持ちの揺れとは異なるものであろう。II伝統的母親型の夫に対する意識は肯定的であるが、子供の父親あるいは、いることがあたりまえの家族員としてとらえており、1人の人間としての受けとめ方は見られなかった。

独立的母親型は、上記のI・II型とは異なり、個としての生き方が前面に出ていることが特徴的で

表3. タイプ別に見たSCT反応の特徴

	「私の人生」	「私の生きがい」	「子供を育てることとは私にとって」	「子供がいなかったら」	「私が母であるということ」	「私にとって夫は」
I 統合型	「温かな家族に包まれ幸せを毎日かみしめている」「今も昔も家族や友人に支えられている」など、幸福感を感じている反応が多く、「夢に自分がどれだけ近づけるか試されている」など、前向きで積極的な姿勢が特徴的である。	「今のところ子供だが、「これから何か探していく」など、子育てがすべてではないという気持ちが推察される反応や家族を思いやる反応が多い。反応内容のほとんどは子供や家族に関するものであり、I群の対象者はすべて生きがいをもっている。	「自分自身の成長」「プラスの面が多い」など育児を自分自身を向上させていけるものとしてとらえている。また「一番大事なこと」「生きがい」「楽しい」など積極的な姿勢で育児に臨んでいる。「かなり大変」といった否定的な反応は1名のみである。	「今の自分はない」「心の成長はなかった」など育児による自分自身の成長をうかがわせる反応が多い。一方、「いなりの人生を歩む」など、子供がすべてではないと思われる反応や「もっと自由な生活ができる」など母親役割を否定するような反応も少数見られた。	全体的に「良き母になるよう努力する」「責任をもちたい」など、母としての自分を積極的に受け入れ、高めていこうとし、「幸せなこと」「感謝したい」と感じているが、「今だに信じられない」「不思議」という反応も少数見られた。	「人生の良きパートナー」「大切な存在」「良き理解者」「心の支え」として夫を信頼し、高く評価していることが推察される。
II 伝統的母親型	「これで十分」「平凡で平和」など現状に満足している反応がほとんどである。また「家族のために働くこと」「子供のためにある」など自分を犠牲にしていると感じられる反応も見られた。	「子供の成長」としては、I群に比べて今後、1人の人間としての生きがいを見つけていこうと感じさせるものが少ない。また「何だろう」「まだ見つからない」「考えたことがない」などの反応も見られた。	「大変だけれど楽しいもの」「夢いっぱいだが悩むことも多い」などI群にはあまり見られなかったアンビバレントな記述が多い。「自分自身の成長」とするものも見られた。	「淋しい」という反応がほとんどである。「それなりに楽しく暮らす」などの反応はわずかであり、子供の存在の大きさが推察される。自分自身の成長や母親役割を否定するような反応は全く見られない。	「子供にとって良き母であるかどうかはわからないが、がんばる」「子供たちによかったと思ってもらえれば」など、子供の気持ちを優先する反応が多い。	「良いパートナー」「一番の理解者」「頼りにしている人」であるが、「子供の父親」というI群には見られなかったとらえ方をしている。また「空気みたいな人」「こんなものかな」など夫の存在が意識されていないと感じられる反応も見られた。

表3. (つづき)

	「私の人生」	「私の生きがい」	「子供を育てることとは私にとって」	「子供がいなかったら」	「私が母であるということ」	「私にとって夫は」
Ⅲ 独立的母親型	I・Ⅱ群には見られない「私のもの」という反応がかなり多い。「まだまだこれから」「充実した日々を送っていききたい」と人生を前向きに考えてはいるが、家族とともに歩んでいくこととする姿勢は感じられない。	「子育ては苦楽に満ちているが生きがいではない」など、家族に関する記述は少ない。人生に対する積極的な姿勢が見られる一方で、「何だろう」「今はない」という漠然とした反応もある。	「自分自身の成長」とするものと、「義務の一つ」「時々苦痛になる」など育児を否定的・消極的にとらえるものに分かれている。I・Ⅱ群に比べ「楽しい」「生きがい」という反応はかなり少なく、育児に対する積極性は見られない。	「仕事をしていた」という反応が圧倒的に多い。また「淋しいかもしれないが、楽でよかったかも」というアンビバレントな反応も多く、母親役割を受容しきれないことが推察される。	「不思議」という記述が最も多く、「あまり思っていない」「時に煩わしいこともあるなど母親としての肯定的感情は少ない。よい母親でありたいという積極性は見られない。	「良きパートナー」とする記述はわずかであり、「ともに生きる相手であってほしい」「共同生活者」「ふつうの人」「同志である」など他群に比べて独立した生活者として意識している側面が見られる。
V 未熟型	「どこでまちがったのか」「思いどおりにならない」など現状に対する不満が感じられる。また「この先どうなるの」「これからが一番きつい」など不安で悲観的な反応も目立つ。Ⅲ群と同様、子供や家族に関する記述はほとんどなく、自分に対しても「何だろう」「わからない」など漠然感が特徴的である。	「何だろう」という反応が最も多い。「子供の成長」とする者も他群に比べて僅かである。現時点で生きがいを見出せていないことが推察される。	「難しい」「重荷」「試練」など育児に対して否定的、消極的であり、「仕事」としてとらえている者も見られる。Ⅲ群と同様、「楽しい」「生きがい」という反応は少ない。	「淋しい」「毎日が退屈でつまらない」という反応も見られるが、「遊んでいるかも」「もう少し自由な行動ができた」「と思うことがある」など母親役割を否定する反応がI・Ⅱ群に比較して多く見られた。	「不思議」「ほとんど罪」「まちがっている」「不徳のいたすところ」など他群に比べて母親としての自分を受容できていない反応が最も多い。「事実」「一生変わらない」という事実を述べているだけの反応も見られた。	「良きパートナー」という反応が多い反面、「いなくてもよい」「永遠の大きな謎」など、否定的な内容や理解し合えていないことが推察される反応も見られた。

あった。母親である自分は「不思議」という反応が象徴的に示しているように、母親としてのアイデンティティが自己にしっかりと定着し受容されていないことが推察された。夫に対しても対等で、独立した生活者として意識されていた。

Ⅳ未熟型は、4タイプの中で否定的な意味合いの反応が最も多く見られ、不適応的タイプであると考えられる。自分の人生に対しても不満や漠然感が強く、将来展望もかなり悲観的であった。育児に対しても否定的、消極的であり、母親としての自分を受容できていない反応が多く見られた。夫に対しても拒否的であったり理解し合えていないことが推察された。このように、各タイプのSCT反応の内容は、本研究で設定した4タイプの定義を明確に裏づけるものであった。本研究によって示唆されたように、子供をもつすべての女性が母親であることを受

容し、母親である自分を自己の生き方の中に統合しているわけではない。特にⅣ未熟型は、母親であることへの不適格感や母親役割を否定する傾向が強いこと、同時に自分の人生に対する不満や不適応感、漠然感も高いことが示唆された。また、Ⅲ独立的母親型は、育児に対して否定的、消極的であり、母親であることにアンビバレントな感情が強く、葛藤状況にあることが推察された。Ⅰ統合型は、個としての自己と母親としての自己が調和し統合されており、4タイプの中で最も成熟したアイデンティティを達成していると考えられる。

これら4タイプの女性の家族との関係を分析すると、Ⅰ統合型が夫を最も積極的、肯定的に受けとめており、家族に対する積極的な関与がしっかりとできていることが示唆された。Ⅱ伝統的母親型も、家族や夫に対する意識は肯定的であるが、Ⅰ型に比

べて主体性の程度は低い。Ⅲ独立的母親型は、夫と対等であることが意識されており、自立性が感じられるが、子供に対する姿勢は、否定的、消極的な面が多い。またⅣ未熟型は、夫や子供に対して拒否的であったり、積極的関与が不十分であることが示唆された。

■ 結論および今後の課題

幼児をもつ母親の母親役割受容には、家族とのかかわり方、特に夫との関係が重要な意味をもっている。母親役割を受容し、積極的に育児に関与していくためには、夫が妻の育児に関心を示し、心理的にサポートしていくことが重要である。

母子保健事業の効果的な展開に関する研究

分担研究者 田 中 義 人
(広島大学医学部保健学科教授)

研究要旨 広島県内に住む乳幼児をもつ母親2,700名を対象に、育児に関するアンケート調査を行った。

働いている母親が、育児に関して職場に望むこととして、子どもが病気の時や学校行事などで休みが気兼ねなく取れるように希望しているものや、企業における保育施設の整備を望む声が多かった。

育児に関して社会に望むこととして、広い公園や安全で静かな環境、保育施設の充実、職場での育児休業、育児手当などの充実、育児休業の保証、育児中の労働時間の短縮、出産後の再雇用制度の保証、相談窓口の充実、などであげられた。

育児に関する不安や悩みでは、育て方に関する悩み、仕事との両立の困難さ、生活のゆとりのなさ、などが目立っていた。

母親が育児そのものにストレスを感じている現状は、今回の調査結果でも、自分の感情でしかってしまふ、イライラして子どもに八つ当たりしてしまふ、生活に余裕がない、自分の時間がない、夫が協力してくれない、自分ひとりだけで育てているような気がする、などの悩みや不満がみられることから窺える。

各機関の連携で、開かれた保育所、延長保育、病児保育、小児科医による育児相談の充実、保育所での検診業務、相談事業の拡充、さらには企業内保育施設の充実などが望まれる。

■ 研究目的

育児支援に対する母親の満足度および要求を、母親の利用する支援施設、育児ストレスの程度、育児意識、就労形態、要求する支援体制のアンケート調査および自由記述により調査し、母親の育児支援要求別分類とそれに合致する支援体制について検討し、その方法を確立させる。

■ 研究方法

広島県内に住む乳幼児をもつ母親2,700名を対象に、育児に関するアンケート調査を行ない、Microsoft Excel 98 日本語版(マイクロソフト社)およびThe Cross 2.0 日本語版(構造計画研究所)を用いて集計・分析した。自由記述の3項目(妊娠中の不安や悩み、育児に関する不安や悩み、育児に関して職場に望むこと)についてはKJ法を用い分析した。

■ 研究結果

- (1) アンケートの回収率は54.2%(1,466通)であった。
- (2) 母親の年齢分布は、20歳未満は0名(0%)、20歳以上25歳未満が75名(5%)、25歳以上30歳未満が368名(25%)、30歳以上35歳未満が641名(44%)、35歳以上40歳未満が299名(21%)、40歳以上が67名(5%)であった。
- (3) 子どもの数は、1人が433名(30%)、2人が700名(47%)、3人が286名(20%)、4人以上が47名(3%)であった。
- (4) 母親の就業状態は、働いている母親が707名(48%)、以前働いていたが現在は働いていない母親が385名(26%)、働いたことのない母親が374名(26%)であった。
- (5) 母親の就業状態を、子どもの数で比較すると、働いている母親の割合は、子どもが1人の母親では

37.9%、2人では50.7%、3人では56.3%、4人以上では57.4%で、子どもの数とともに割合が増加していた。子どもが1人の母親では働いている母親の割合が有意に低かった ($p<0.01$)。母親の年齢で比較すると、働いている母親の割合は、20～25歳では14.7%、25～30歳では37.2%、30～35歳では50.5%、35～40歳では62.2%、40歳以上では61.2%であった。20～30歳の若い母親の働いている割合が有意に低かった ($p<0.01$)。また、以前働いていたが今は働いていない母親の割合は、20～25歳では45.3%、25～30歳では37.8%、30～35歳では25.3%、35～40歳では11.0%、40

表1：育児に関して職場に望むこと
(働いている母親707名：自由記述)

子どもが病気の時、休みが気兼ねなくとれる
 保育施設の整備 (せめて病児保育)
 子どもの学校行事などで休みが気兼ねなくとれる
 育児休暇が気兼ねなくとれる、期間の延長
 短時間勤務、フレックスタイム
 定時に退社できるように
 職場の理解と協力
 保育料の (一部) 負担
 特にない
 回答総数

歳以上では17.9%で、20歳～30歳の母親に有意に多かった ($p<0.01$)。

(6) 母親仲間の有無を母親の就業状態により比較すると、母親仲間がいない割合は、働いている母親では27.6%、以前働いていたが今は働いていない母親では16.8%、働いたことのない母親では16.6%で、働いている母親に有意に多かった ($p<0.01$)。子どもの保育場所により比較すると、母親仲間がいないと答えた割合は、自宅で保育している母親の20.2%、保育園にあずけている母親の27.7%、幼稚園に通わせている母親の7.9%で、幼稚園で保育している母親の割合が有意に少なかった ($p<0.01$)。

(7) 働いている母親707名に、育児に関して職場に望むことを自由記述してもらったところ、327名 (46.3%) に記述がみられた (残りは無記述であった)。記述内容を整理すると、子どもが病気の時や学校行事などで休みが気兼ねなく取れるように希望しているもの

が136名 (41.6%) にみられた。また、企業における保育施設の整備を望む声も72名 (22.2%) にみられた (表1)。

また、自分の子どもが病気になった場合に誰が世話をするかを複数回答してもらったところ、自分 (母親自身) や祖母などの女性が世話をするという回答が905例と88.6%を占めていた。夫 (父親) などの男性が世話をすると答えたのは106例 (10.4%) であった。病児保育の利用は7例 (0.6%) と少数であった (表2)。

自分 (母親自身) が病気になった場合に子どもの世話は誰がみるか、という設問に対しては、祖母がみってくれるという回答が455例 (46.8%)、夫 (父親) がみってくれるものが384例 (39.5%)、自分自身 (誰もかわりがいない) でみるという回答が89例 (9.1%) であった (表3)。

(8) 子育てに関して夫に相談した時の夫の態度に関する設問では、夫は話しを聞いてくれる、いつも一緒に考えてくれる、適切なアドバイスを与えてくれるなど、積極的にかかわってくれるという回答が2,019例で75%以上をしめ、時には不機嫌になる、無関心なことが多いという回答が354例で15%以下であった。
 (9) 育児に関する不安や悩みの自由記述内容を検討すると、1,466名のうち629名 (43%) に記述がみられ、837名 (57%) は無回答であった。記述内容では、育て方に関する悩み、仕事との両立の困難さ、生活のゆとりのなさ、などが目立った。これに関してはKJ法によりさらに詳しく分析中である。

(10) 母親の生き甲斐に関する設問では、家庭の幸

表2：あなたのお子さんが病気になった場合
 お子さんの世話をするのはだれですか
 (働いている母親707名：自由記述、複数回答)

自分 (母親自身)	684
祖母 (どちら方か不明)	106
自分の母親 (母方の祖母)	79
夫の母親 (父方の祖母)	72
夫 (父親)	106
病児保育	7
みんな	1
交替で	1
いません	1
わからない	1
回答総数	707

表3：あなた自身が病気になった場合
お子さんの面倒をみるのはだれですか
(動いている母親707名：自由記述、複数回答)

夫（父親）	384
祖母（どちら方が不明）	169
自分の母親（母方の祖母）	155
夫の母親（父方の祖母）	131
自分（母親自身）	89
保育園	15
自分（母親）の同胞	13
いない	12
近所の人	2
曾祖母	1
子ども同士	1
わからない	1
回答総数	707

せ、子どもの成長、子育てという回答が2,300例と80%以上を占め、自分の趣味や仕事が生き甲斐という回答が446例（15.8%）であった。

(11) 育児に関して社会に望むことは、広い公園や安全で静かな環境、保育施設の充実、職場での育児休業、育児手当などの充実、育児休業の保証、育児中の労働時間の短縮、出産後の再雇用制度の保証、相談窓口の充実、などであった。これに関してはKJ法によるさらに詳しく分析中である。

(12) 「妊娠中の不安や悩み」に関する自由記述は617通に記述があり、KJ法により分析中である。記述内容より653枚のカードを作成した。現在カテゴリー別に分類し、分析中である。最も多かったものは「流・早産の不安」であった（98件）。ついで「五体満足かどうか」「健康に生まれてくるかどうか」「母体の健康状態の不安」「上の子との接し方の不安」が多くあった。「仕事との両立」に関しては「仕事が続けられるか」「職場に迷惑がかかる」「人間関係のストレス」など、19件の記載があった。夫婦関係の悩みの記述は18件みられたが、夫の協力

が得られない悩みが多かった。「分娩時に上の子の面倒をみてくれる人がいない」という不安が20件にみられた。また、義母との関係にストレスを感じている記述が8件あった。かかっている産院への不満や不安が8件にみられた。さらに詳しく分析して来年度に報告する予定である。

(13) 「育児に関して職場に望むこと」に関する自由記述は276通に記述があり、KJ法にもとづき記述内容より312枚のカードを作成した。現在、カテゴリー別に分類し、分析中である。

■ 考 察

乳児期に限れば、子どもに最も近い距離にあるのは母親である。この時期に育児に専念でき、子育てに喜びをみいだせる環境にある母親は幸せである。しかし、現実には

育児以外の様々なストレスが母親をとりまいている。育児以外の家事、家庭の問題、仕事の問題、夫婦関係、種々の人間関係のストレスが重なり、育児に専念できない状況にある。このため育児そのものにもストレスを感じるようになってしまう。

今回の調査結果でも、自分の感情でしかってしまう、イライラして子どもに八つ当たりしてしまう、生活に余裕がない、自分の時間がない、夫が協力してくれない、自分ひとりだけで育てているような気がする、などの悩みや不満がみられた。

子育てに無理は禁物である。すべての親が楽しく余裕をもって子育てができるような子育て支援体制が求められている。過半数が満足できる体制、あるいは平均値的な体制ではなく、すべての親のニーズに100%対応できる柔軟性のある支援体制が理想である。

各機関の連携で、開かれた保育所、延長保育、病児保育、小児科医による育児相談の充実、保健所での健診業務、相談事業の拡充、さらには企業内保育施設の充実などが望まれる。

幼児期における基本的情緒形成とその障害に関する研究

幼児期の自己制御機能の発達

—思いやり、攻撃性、親子関係との関連—

分担研究者 森 下 正 康

(和歌山大学教育学部教授)

研究要旨 幼児の自己制御機能の発達をめぐって、思いやりや攻撃性、親子関係との関連について検討した。3歳10ヶ月～6歳10ヶ月の幼児の母親316名を対象に評定を求めた。その結果、(1)自己抑制は「欲求不満耐性」「遅延可能性」「根気」の3因子、自己主張は「正当な要求」「能動性」の2因子から成っていた。自己抑制機能は年中から年長にかけて発達するのに対して、自己主張機能は年齢差がなかった。(2)自己抑制機能が思いやりや攻撃性と関連が深かった。(3)男児の場合、母親の受容的態度が子どもの自己主張機能や、時には自己抑制機能の発達にプラスの影響を与える可能性があった。女兒の場合、受容的態度は子どもの自己抑制機能の発達にプラスの影響を、統制的態度や力中心の養育スタイルは自己抑制や自己主張の発達にマイナスの影響をもたらす可能性のあることが明らかとなった。

■ 研究目的

新しい時代を生きるために必要なものは何か。それは、豊かな知性や体力と共に、自分で自分の感情や行動を制御する能力(自己制御能力)と人間関係を結ぶ社会性の能力であると考え。子どもたちのなかにそれらが豊かに育つために、私たちは何をすればよいのだろうか。この点を明らかにすることが、一連の研究の最終目標である。

そこで、まず幼児期に自己制御(self-regulation)機能がどのように発達するのかを明らかにしたい。自己制御機能は自己抑制と自己主張(自己表現)の両側面からなると考えられている。柏木(1985)によれば、自己抑制は行動の抑制・制止としての行動制御(調節)の側面であるのに対して、自己主張は自分の意志、欲求を明確にもち、これを外に向かって表し実現するという側面である。

自己抑制や自己主張の因子について、すでに、柏木(1985)は幼稚園場面における担任教師の評定の分析を通じて明らかにしている。自己抑制については遅延可能性、制止・ルールへの従順、フラストレーション耐性、持続的対処・根気の4因子を、自己主張については遊びへの積極的参加、独自性・能動性、拒否・強い自己主張の3因子を見出している。

本研究では、今後の研究のために幼児から小学生や中学生までを視野にいれた項目を作成し、家庭における幼児の自己制御の発達について検討する。そこでまず、母親の評定に基づいて家庭における

自己抑制や自己主張の因子を明確にし、それぞれの因子が年齢と共にどのように変化するかを明らかにしたい。

社会性の側面については、本研究では思いやり(向者社会的行動へ向かう態度・特性)と攻撃性にライトを当てる。幼児の思いやりについては、すでに検討してきた(森下、1998)ので、自己制御機能に焦点を当てながら、思いやりと攻撃性との関連を検討したい。つまり、思いやりや攻撃性は自己制御機能のどのような側面と関連が深いかにについて明らかにしたいと考える。

第3に自己制御は親子関係のどのような次元と関連が深いかにについて検討する。最後には親子の相互作用を取り上げる必要があるが、本研究では親の養育態度や養育スタイルに焦点を当てる。親の養育態度の主要な次元として、愛情に関する因子(受容・拒否)と行動の統制(統制・自律性尊重)に関する因子が存在する(森下、1991)。また、養育スタイルや養育ストラテジー(Hoffman,1963)が子どもの自己制御の発達に影響すると考えられる。養育態度の介入・過保護に関しては、それが自己制御の発達にマイナスの影響を与えると指摘されてきた(柏木、1985)。命令や脅しを中心とする力中心の養育スタイルは、自己制御の発達にマイナスの影響を与え、説明し自ら考えさせ誘導する養育スタイルはプラスの影響を与えると考えられる。特に、子どもの気持ちや自我に訴えるしつけスタイルは日本の特徴であり、子どもの自己制御、特に自己抑制の側面の発達に大きな影響をおよぼすと

考えられる (東, 1994)。

■ 研究方法

1. 調査対象

和歌山市近郊のW幼稚園において、年少・年中・年長児の母親 357 名が調査対象となった。記名式とし、幼稚園の全面的な協力により回収率 100% となった。その中で、記入漏れなどのデータを除いて、分析の対象となったのは、自己抑制や自己主張の項目に関する因子分析では、表 1 に示すように計 316 名であった。自己制御と他の変数との関連についての分析対象は、表 1 の () に示すように計 275 名であった。

表 1 分析の対象数

	男児	女児	計
年少児 (3:10-4:10)	41 (33)	33 (30)	74 (63)
年中児 (4:10-5:10)	61 (50)	53 (47)	114 (97)
年長児 (5:10-6:10)	68 (63)	60 (52)	128 (115)
合計	170 (146)	146 (129)	316 (275)

() 内の数字は全てのデータがそろった者

2. 手続き

家庭に質問紙を配布し、母親に対して評定を求めた。

3. 調査時期

1999 年 2 月

4. 調査内容

①自己制御に関しては、矢川 (1999) の項目を基に自己抑制については 25 項目、自己主張については 30 項目を作成した (付表 1、2)。この項目の特徴は「...ができる」という表現ではなく、「...する」というように行動の側面を評定する表現になっている。「はい」「?」「いいえ」の 3 件法で評定を求めた。

②思いやりと攻撃性：森下 (1985) の項目それぞれ 8 項目ずつをランダムに配列をした (付表 3)。上と同じ 3 件法。

③養育態度の受容と統制：鈴木ほか (1985) から受容と統制についてそれぞれ 8 項目ずつ選択しランダムに配列した (付表 3)。3 件法。

④養育スタイル：末田・庄司・森下 (1985) の研究結果から 10 場面を選び、それぞれ「統制・無視」と「協調性」の態度を表す項目をそれぞれ 10 項目ずつ選出した (付表 4)。そして、力中心養育スタイルと誘導的養育スタイルの尺度とした。

■ 研究結果

1. 自己抑制と自己主張の発達の变化

まず、自己抑制 25 項目について主成分分析をおこない固有値の変動から因子数を 4 と決め、続いて主因子分析をおこない最終的に斜交因子解を得た。そのうち α 係数の高かった第 1 因子 (欲求不満耐性: 0.972)、第 2 因子 (遅延可能性; 0.780)、第 3 因子 (根気: 0.723) についてそれぞれ 5 項目からなる尺度を作成した (表 2)。尺度間には正の相関 (0.288-0.383) があつたので、その総得点を自己抑制の得点とした。

表 2 自己抑制の因子と項目

第 1 因子 (欲求不満耐性: 我慢できる)

1. 先生や友だちの話を終わりまでしっかりと聞く。
2. 「してはいけない」といわれたことは、しない。
3. 人のものを勝手にさわったり、使ったりしない。
4. 先生が話しているとき、退屈するとよそ見をしたり手遊びをする。*
5. 面白くなくても、終わりまでだまって人の話を聞く。

第 2 因子 (遅延可能性: 待てる)

1. 遊んでいるとき、きちんとルールを守れる。
2. 遊びの時、自分の順番がくるまで待てる。
3. 自分の使いたい遊び道具を、かわりばんこに使える。
4. 欲しいものがすぐ手に入らなくても、がまんできる。
5. 「あとにしろさい」といわれれば、待てる。

第 3 因子 (根気: 最後までがんばる)

1. 時間がかかっても、最後までがんばる。
2. けがをしたり、少しぐらい血が出たりしても泣かない。
3. ちょっと失敗したりうまくいかない、すぐあきらめる。*
4. やりたくないことでも、やらないといけなときはやる。
5. 難しいことでも、あきらめずにやる。

* 逆転項目

次に、自己主張 30 項目について同様の分析をした結果、斜交 5 因子解が得られた。そのうち第 1 因子 (正当な要求) と第 2 因子 (能動性) の α 係数がそれぞれ 0.981、0.731 と高かつたので、各 7 項目からなる尺度を作成した (表 3)。尺度間の相関 (0.578) は高かつたので、その総得点を自己主張得点とした。

自己抑制と自己主張の得点分布は図 1、2 のとおりであった。いずれの分布も右側に偏っていて、平均値 (SD) はそれぞれ 21.0(5.39)、20.3(5.53) と高い値となっている。

自己抑制得点について年齢別の平均値を図 3 に示す。3 (学年) × 2 (性別) の分散分析の結果、学年差のみが有意であった (F(2,269)=8.91, p < 0.001)。そこでチューキーの法により多重比較を

表3 自己主張の因子と項目

第1因子(正当な要求)

1. いやなことは、はっきり「いや」という。
2. 友だちにいじわるされたり、いやなことをいわれたとき「やめて」という。
3. 遊んでいるとき、ずるいことをした子に「だめ」という。
4. ひどい悪口を言われたり、からかわれたとき怒る。
5. 自分の席に座っている子にのいて欲しいとき、「のいて」という。
6. 自分の番に誰かが割り込んできたとき、「順番を抜かさないう」という。
7. 自分のものをとられたとき「かえして」という。

第2因子(能動性)

1. してほしいこと、欲しいものをはっきり大人に頼む。
2. 他の人と意見がちがっていても、自分の意見を言う。
3. 自分の思ったことを、みんなの前でなかなか口に出していえない。*
4. 進んで手をあげて発表する。
5. 入りたい遊びに、自分から「いれて」という。
6. いやなことを言われたりされたりしたとき、泣いたり黙ってしまったりする。*
7. 人に聞かれたら、はきはき答える。

* 逆転項目

おこなったところ、年少児と年中児の間には有意差はないが、年少児と年長児、年中児と年長児の間に有意差があった。つまり、自己抑制機能は年中から年長にかけて発達すると考えられる。さらに、因子ごとに検討した結果、第1因子(欲求不満耐性)と第3因子(根気)については上記と同じような結果であった。第2因子(遅延可能性)についてはその変化が緩やかで、年少児と年長児との間においてのみ5%水準で有意差があった。

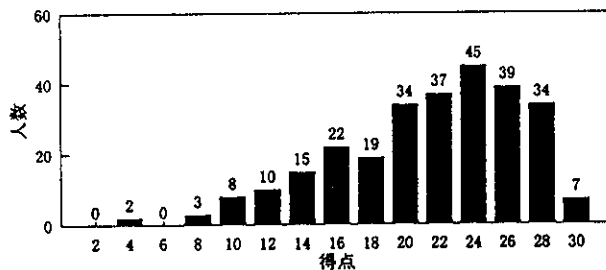


図1 自己抑制の得点分布

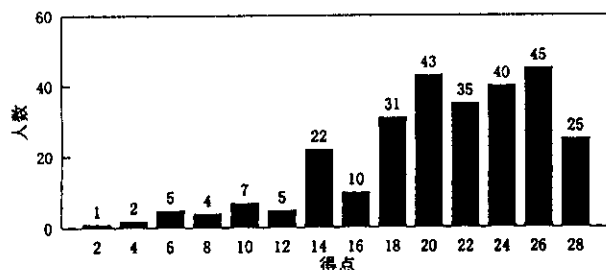


図2 自己主張の得点分布

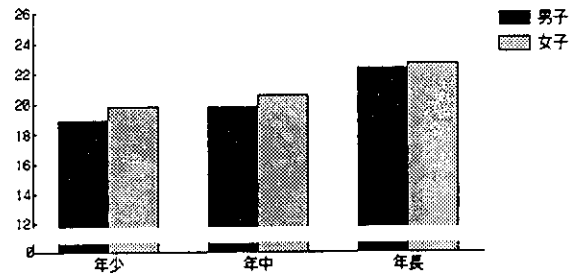


図3 自己抑制機能の発達

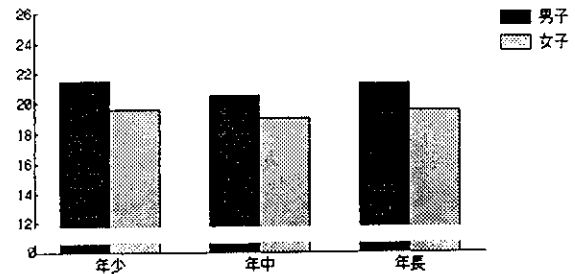


図4 自己主張機能の発達

自己主張は、図4に示すように男子の方が女子よりも得点が高かった($F(1,269)=6.45, p<0.05$)が、年齢差はなかった。各因子ごとにみえていくと、性別差は第1因子(正当な要求)ではなく第2因子(能動性)においてのみ有意で、男子の方が得点が高かった。

2. 自己制御と思いやり、攻撃性

年中児と年長児についてそれぞれ男女別に、自己抑制、自己主張の各尺度の中央値を用いてH群とL群に分類し、それぞれの群について思いやりと攻撃性の得点を比較した。年少児はデータ数が少なかったため、このような分析はしなかった。

年中児の各群における思いやり得点を図5に示す。男女別に2(自己抑制H・L)×2(自己主張H・L)の分散分析をおこなったところ、男子にのみ有意な結果が得られた。思いやりについて図5のように、交互作用はないが、自己抑制と自己主張の両要因共に有意差があった。つまり、自己抑制の高い群の方が思いやり得点が高く、さらに自己主張の高い群の方が思いやり得点が高かった。したがって、年中の男児においては、自己抑制と自己主張の両方とも高い者(HH群:自己制御機能の高い者)が思いやりが強く、その反対に両方とも低い者は思いやりが低いといえる。攻撃性については、図6が示すように、男子のみ自己抑制の高い群の方が有意に得点が低かった。

年長児の各群における思いやり得点を図7に示

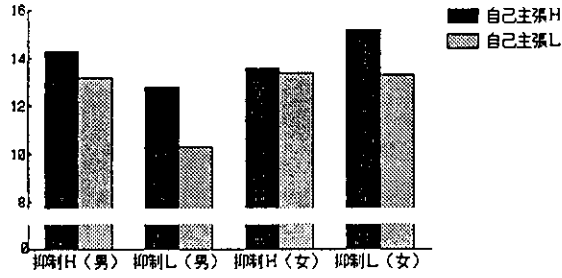


図5 思いやり (年中: 男/女)

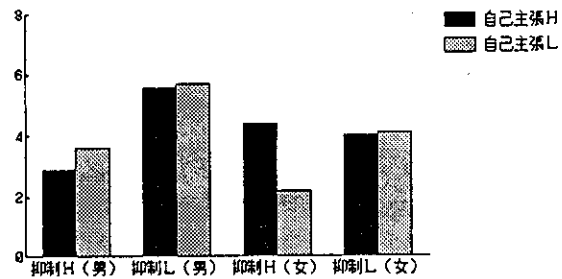


図6 攻撃性 (年中: 男/女)

す。男女別に2 (自己抑制H・L) × 2 (自己主張H・L) の分散分析をおこなったところ、男女共に自己抑制の高い群の方が低い群よりも有意に思いやり得点が高かった。自己主張の要因には有意差はなかった。それに対して攻撃性は、図8に示すように、男女共に自己抑制の高い群の方が得点が有意に低かった。ここでも自己主張の要因には有意

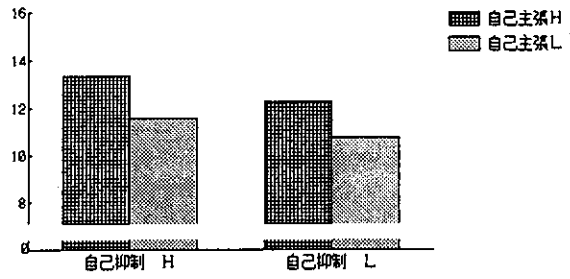


図9 受容 (年中: 男)

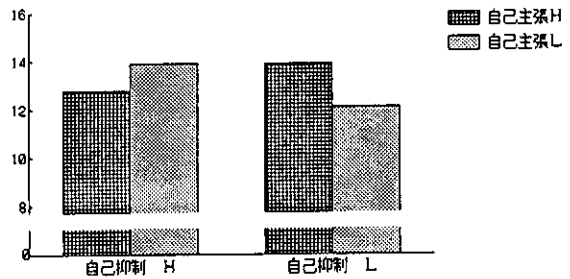


図10 受容 (年長: 男)

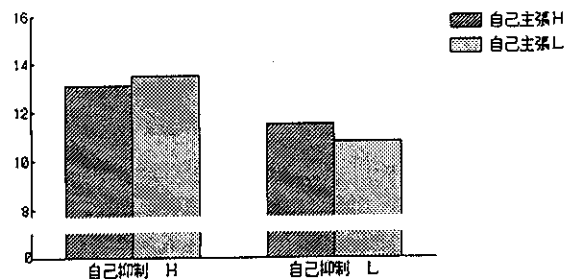


図11 受容 (年長: 女)

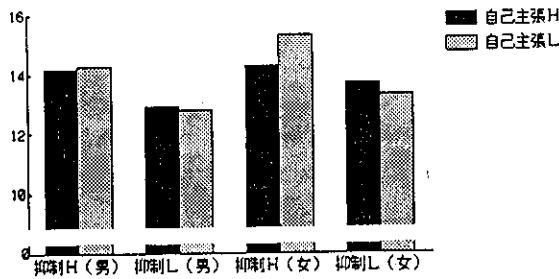


図7 思いやり (年長: 男/女)

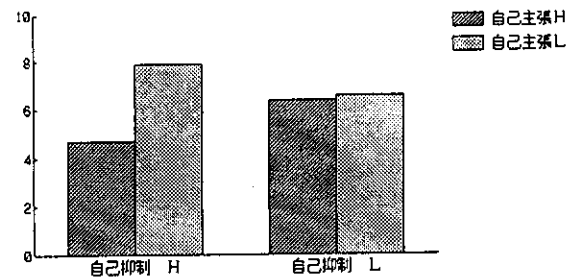


図12 統制 (年長: 女)

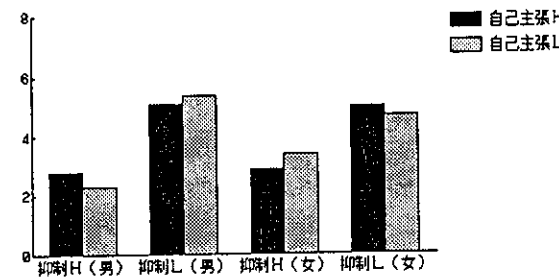


図8 攻撃性 (年長: 男/女)

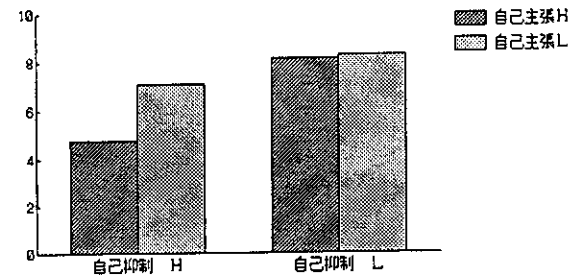


図13 力中心 (年長: 女)

差はみられなかった。

3. 親子関係と自己制御

自己抑制・自己主張と母親の養育態度・養育スタイルとの関連について分析した。

男子について、受容的態度に関して、年中児の場合、図9に示すように、交互作用はなく自己主張の高い群の方が母親の受容得点が高かった。

自己抑制には有意差がなく交互作用も有意ではなかった。年長児の場合、図10に示すように、交互作用が有意で、自己抑制が高く自己主張の低い群(HL)と、自己抑制が低く自己主張が高い群(LH)は母親の受容得点が高かった。その他の変数に関しては有意差はなかった。

女子について、年中児ではいずれの変数についても有意差がなかった。年長児の女子の場合、受容的態度について、図11に示すように自己抑制の高い群の方が母親の受容得点が有意に高かった。統制的態度について、図12のように、交互作用が10%水準で有意であった。つまり、自己抑制の高い場合に自己主張の低い群(HL群)の母親の統制得点が高く、自己主張の高い群(HH群)の母親の統制得点は低かった。力中心の養育スタイルについては、図13のように、自己抑制の高い群の方が低い群よりも母親の力中心得点が有意に低く、特にHH群の得点が低いのが特徴的であった。

■ 考 察

1. 自己制御の発達

因子分析の結果、自己抑制は「欲求不満耐性」「遅延可能性」「根気」の3因子から成立していた。また、自己主張に関しては「正当な要求」「能動性」の2因子から成っていた。この因子内容は、柏木(1985)の結果とほぼ対応している。したがって、家庭における子どもの自己抑制や自己主張の構造は、幼稚園場面におけるそれと類似していると考えられる。

年齢間の比較結果によると、自己抑制機能は年中(ここでは5歳)から年長(6歳)にかけて発達することが明らかになった。その内容は主として「欲求不満耐性」と「根気」の高まりであった。「遅延可能性」については緩やかな発達がみられた。その様相には特に男女の差はみられなかった。それに対して、自己主張機能は年齢による差はなく、男児の方が女児よりも得点が高かった。その因子内容を吟味すると、性別差をもたらしているのは、「正当な要求」因子ではなく、「能動性」因子の方で

あった。つまり、男児の方が女児よりも能動的であった。

2. 自己制御と思いやり、攻撃性

男子について、年中児の場合、自己抑制の高い群の方が思いやり得点が高く、さらに自己主張の高い群の方が思いやり得点が高かった。すなわち、自己抑制も自己主張も共に高い子どもたち、つまり自己制御機能の高い子どもたちは思いやりが豊かだと考えられる。年長児の場合、自己抑制機能の高い子どもたちが思いやりが高かった。したがって、自己抑制が思いやりに対してもつ機能は年齢によって変化しないが、自己主張機能のそれは年齢によって変化していると考えられる。

女子について、年中児の場合は自己制御と思いやりには有意な関連はなかったが、年長児の場合、それが認められた。つまり、年長児の場合は男子と同じように、自己抑制機能の高い子どもたちの思いやり得点が高かった。

以上のように、自己抑制機能の発達が思いやりの発達と関連性が深いと考えられる。他方、自己主張機能の発達も、決して思いやりの発達を阻止するものではなく、時には促進機能をもっているのではないかと考えられる。

攻撃性について、年長児の男女に共通して、自己抑制の高い群の方が攻撃性得点が低かった。自己主張にはそのような関連はみられなかった。したがって、自己抑制機能は攻撃性をも抑制していると考えられる。また、ここでの自己主張は、攻撃性とは異なった別の概念だということが分かる。

3. 親子関係の自己制御への影響

男子の場合、年中児では、自己主張の高い子どもたちの方が母親の受容得点が高かった。したがって、年中児の場合、母親の受容的態度が子どもの自己主張機能をはぐくむ可能性がある。それに対して、年長児の場合、自己抑制が高く自己主張の低い子どもたちと自己主張が高く自己抑制の低い子どもたちの母親は受容得点が高かったのである。つまり、母親の受容的態度が子どもの自己抑制を育てる場合と、自己主張を育てる場合に分かれ、必ずしも両方の機能を高めるというようには作用しないという可能性がある。したがって、自己抑制と自己主張の機能の両方を高めるためには、もう一つ別の態度次元を考える必要があるのではないか。

女子については、年長児において、自己抑制の高い子どもたちの方が、母親の受容得点が高かった。したがって、ここでは母親の受容的態度が女児の自

己抑制機能をはぐくむ可能性があると考えられる。女兒に特徴的なのは、統制的態度や力中心の養育スタイルの影響であった。統制的態度は自己抑制の高い子どもの場合、自己主張の発達を阻止する可能性があった。さらに、力中心の養育スタイルは、自己抑制の発達を阻止し、その反対に力中心得点の少なさが自己抑制と自己主張の発達に大きく作用している可能性がある。

4. 研究の問題点と今後の課題

本研究においては、子どもの自己制御等については母親の評定に基づくものであった。したがって、子どもの自己制御等についての母親の評定が信頼性の高いものであったかどうか問題となる。調査が記名式であったので、よく見せようとする動機が働いたかも知れない。さらに、母親の養育態度等も母親自身の評定に基づくものであり、子どもの変数と母親の変数間の関連を分析した結果には、同一評定者による反応セットなどの影響が反映されている可能性がある。

また、このような調査的研究法では、親の態度が子どもに影響したのか、それとも子どもの特徴が親の態度に影響したのか、そのような因果関係を明確にできないという限界がある。

さらに、子どもの発達にとって父親の影響は重要である。したがって、家庭のなかでの子どもに対する母親と父親の役割、その機能が子どもの自己制御機能の発達にどのような影響を与えるかを明らかにすることが、残された重要な課題である。

家庭での子どもの特徴はそのまま幼稚園等での行動に現れるのか、それとも違うのか。両者が一致する子どもと一致しない子どもがいるとすれば、それはどうしてか。子どもの自己制御機能が発達するためにはどのような経験が必要なのか、さらに周りからのどのような援助が必要なのか、多くの課題が残っている。

したがって、次に幼稚園等での子どもの行動に

焦点を当て、担任教師等からの評定や行動観察に基づいて研究を進めたいと考えている。

■ 結論

人間が豊かに生きていくために、自己を抑制する能力と自己を主張する能力のバランスのとれた発達が重要だと考える。幼児の自己抑制は「欲求不満耐性」「遅延可能性」「根気」の3因子から成っていた。また、自己主張は「正当な主張」と「能動性」の2因子から成っていた。これらは自己制御にとって重要な因子である。

自己制御機能の発達について、自己抑制機能のうち「欲求不満耐性」と「根気」は年中から年長にかけて発達することが明らかとなった。自己主張機能の方は4歳以後すでに年齢による変化はなく、男児の方が女兒よりも「能動性」の得点が高かった。

これらの自己制御機能の中で、自己抑制機能の発達が「思いやり」の発達と関連性が深いということ、さらに自己主張機能も、時には「思いやり」の発達を促進する可能性があるということが明らかとなった。また、攻撃性には自己抑制機能が深く関連している。

自己制御の発達に対して母親の果たす役割について検討した結果、男児の場合、母親の受容的態度が子どもの自己主張機能の発達にプラスの影響を与える可能性がある。また、時には自己抑制の発達にも影響するが、両機能の発達に同時にプラスの影響を与える態度パターンは明確にはならなかった。女兒の場合、母親の受容的態度が自己抑制機能の発達にプラスの影響をもたらす可能性がある。他方、統制的態度や力中心の養育スタイルは自己抑制や自己主張の発達にマイナスの影響もたらす危険性がある。

(付記) 調査にご協力くださいました和歌山県W幼稚園の先生方や保護者の方に深く感謝いたします。

付表1

お願い

子どもたちが新しい時代を豊かに生きるために、私たちは何をしたらいいのでしょうか、そのようなことについて研究しています。そこで、このアンケートにご協力していただけませんか。研究結果は、全体として分析しますので、個人の名前が出ることはありません。よろしくお願ひいたします。

和歌山大学教育学部 教授 森下正康

ふだんのお子さんの様子について、ありのままにつけてください。

(できればお母様が記入してください)

記入者 (母親・父親・その他 ())

お子さんの名前 _____ (男・女)

クラス (年長・年中・年少) _____ 組 _____ 満 _____ 歳 _____ ヶ月

お子さんについて、当てはまるところに○をしてください。

	は	い	い
	い	?	え
(例) 朝起きたら、すぐに顔を洗う。 -----	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
1 時間がかかっても、最後までがんばる。 -----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
2 たたかなくても、すぐにたたきかえさない。 -----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
3 あそんでいるとき、きちんとルールを守れる。 -----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
4 腹が立ったら、ものをほったりけったりする。 -----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
5 あそびのとき、自分の順番がくるまで待てる。 -----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
6 自分の使いたいあそび道具を、かわりばんこに使える。 -----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
7 ほしいものがすぐ手に入らなくても、がまんできる。 -----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
8 だれかに注意されなくても、きちんと順番にならべる。 -----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
9 先生や友だちの話をおわりまで、しっかり聞く。 -----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
10 「あとにしなさい」といわれれば、待てる。 -----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
11 ほかの子話を、おわりまで聞いてから、自分が話をする。 -----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
12 「してはいけない」といわれたことは、しない。 -----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
13 けがをしたり、すこしぐらい血がでたりしても泣かない。 -----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
14 人のものをかかってにさわったり、使ったりしない。 -----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
15 自分には、損をすることでも、友だちのためにゆずれる。 -----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
16 自分が使ったものは、もとのとおりがたずける。 -----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
17 ちょっと、失敗したりうまくいかないと、すぐにあきらめる。 -----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
18 やりたくないことでも、やらないといけないときはやる。 -----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
19 すこしぐらい、いたずらされても怒らない。 -----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
20 先生が話しているとき、退屈するとよそ見をしたり手あそびをする。 -----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
21 いやなことをいわれても、言い返したり怒ったりしない。 -----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
22 人が見ていないとき、ルールを守らないときがある。 -----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
23 むずかしいことでも、あきらめずにやる。 -----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
24 おもしろくなくても、おわりまでだまって人の話を聞く。 -----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
25 勝ち負けのあるゲームで負けたら、怒ったり文句を言ったりする。 -----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

付表 2

子どもさんのことについて	は	?	いいえ
	い		え
1) いやなことは、はっきり「いや」という。-----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
2) してほしいこと、欲しいものをはっきり大人にたのむ。-----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
3) ふざけている子に「きちんとして」という。-----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
4) ほかの人と意見がちがっていても、自分の意見をいう。-----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
5) 友だちにいじわるされたり、いやなことをいわれたとき「やめて」という。-----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
6) あそんでいるとき、ずるいことをした子に「だめ」という。-----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
7) それはちがうと思っても、なかなか相手にいえない。-----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
8) けんかをしている子に「けんかをやめて」という。-----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
9) あそびたくないとき、「あそべない」という。-----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
10) ひどいわる口をいわれたり、からかわれたとき怒る。-----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
11) 自分の思ったことを、みんなのまえでなかなか口に出していえない。-----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
12) なにかしていて分からないとき、「教えて」という。-----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
13) 忘れ物をしたとき、「かして」という。-----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
14) 自分の席に座っている子にのいてほしいとき、「のいて」という。-----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
15) 早く帰らないといけなのに、友だちに「まっけて」といわれたら、いやとはいえない。-----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
16) 自分の番に、だれかがわりこんできたとき「順番をぬかさなで」という。-----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
17) 意味がわからないとき、わかるまで質問する。-----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
18) すすんで手をあげて、発表する。-----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
19) 一人でできないとき、「てつだって」という。-----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
20) しんどいとき、自分から「休ませて」という。-----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
21) はいりたいあそびに、自分から「いれて」という。-----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
22) よいことや正しいと思うことはすすんでいったり、したりする。-----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
23) 自分のものをとられたとき「かえして」という。-----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
24) 楽しかったことやうれしかったことがあったとき、すすんで話をする。-----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
25) やりかたが分からないとき、自分から「どうするの」ときく。-----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
26) いやなことをいわれたりされたりしたとき、泣いたり黙ってしまったりする。-----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
27) 自分がわるくないのにしかられたとき、「ちがう」という。-----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
28) 人に聞かれたら、はきはきこたえる。-----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
29) こまったことがあっても、じぶんから人に話せない。-----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
30) どうしていいか分からないことは、だまっていなくて人に聞く。-----	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

裏にも記入してください

付表 3

子どもさんのことについて		は	?	い
		い		え
1	素直である			
2	めんどろみがよい			
3	友だちやきょうだいとよくけんかをする			
4	言葉づかいがあらう			
5	親のいうことをきかない			
6	年下の子どもをかわいがる			
7	気が優しい			
8	生き物をよくかわいがる			
9	すぐ暴力をふるう			
10	友だちをつねったり叩いたりする			
11	お母さんのお手伝いをよくする			
12	物を乱暴にあつかう			
13	友だちに対して親切である			
14	気に入らないことがあると暴れる			
15	思いやりがある			
16	自分より小さい子どもをいじめる			

あなたは、子どもさんに対して、ふだんどのように接してられるでしょうか。
ありのままにお答えください。

		は	?	い
		い		え
1	子どもの悩みや心配事を理解している			
2	子どものした悪いことは、みな何かのかたちで罰を与えるべきだと思う			
3	子どもと一緒に外出や旅行をするのが好きだ			
4	子どもにたびたび話しかける			
5	子どもが外から時間通りに帰ってくるように、いつもさせている			
6	子どもを、自分の言いつけ通りにしたわがさせている			
7	子どもが怖がっている時には安心させてやる			
8	うちで子どもと楽しい時間を過ごす			
9	子どもに、何事もどんなふうにしたらよいかを事細かに言い聞かせる			
10	子どもが喜びそうなことをいつも考えている			
11	子どもがすべきことをちゃんとしてしまうまで、何回でも指示する			
12	子どもにはできるだけ私の考え通りにさせたい			
13	子どもが言いつけ通りにするまで、子どもを責め立てる			
14	子どものことに充分気を配っている			
15	自分のことは我慢しても、子どものためにしてやるのがよくある			
16	子どもに、自分で物事を決めさせることはあまりない			

付表 4

家庭の中で次のような場面が生じた時、
あなたは子どもさんに対してどのように対応していますか。

例えば次のように言うことが、日ごろ、どの程度ありますか。
当てはまるところに○をしてください。

- | | よくある | ときどきある | あまりない |
|--|--------------------------|--------------------------|--------------------------|
| 1 『夕食の用意ができていのに、遊びに行ったまま帰ってこず、呼びにいくと「もっと遊んでいたい」と言い張った時』
(1) 「ご飯だからだめです、早く帰ってきなさい」 ----- | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| (2) 「また明日遊ぼうね」 ----- | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| 2 『気分が悪くて寝ているところに、子どもが帰ってきた時』
(3) 「しんどいからじぶんでやってね」 ----- | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| (4) 「しんどいからしずかにしなさい！」 ----- | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| 3 『すぐ帰るからと留守番を頼んで出かけたけれど用事が長引き、急いで帰ってみると、そこらじゅう散らかしたまま遊びにいつってしまった時』
(5) 「今度からは気をつけてね」 ----- | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| (6) 「ちゃんと留守番してなきゃだめでしょ！」 ----- | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| 4 『さわらないように注意しておいたのに、大切な預かり物を、子どもがさわって壊してしまった時』
(7) 「だから言ったでしょ、どうするの！」 ----- | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| (8) 「これからは気をつけようね」 ----- | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| 5 『子どもと一緒にどこかに行く約束をしてあったのに、急用ができてしまった時』
(9) 「ご用ができたからしかたないでしょ！」 ----- | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| (10) 「また、今度にしようね」 ----- | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| 6 『用事で外出したため、夕食の準備が遅くなり、急いでしたくをしていのに、「おなかすいた、何か欲しい」などと邪魔ばかりする時』
(11) 「すぐできるから我慢してね」 ----- | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| (12) 「邪魔しないであっちへ行ってなさい！」 ----- | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| 7 『他にもたくさん買い物があつたので、子どもと約束していたおもちゃを買ってくるのを忘れた時』
(13) 「我慢しなさい！」 ----- | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| (14) 「明日買ってくるから我慢してね」 ----- | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| 8 『部屋のすみにほったらかしになっていたおもちゃを、お母さんがうっかりとふみつぶした時』
(15) 「こんなところにおいておくからでしょ！」 ----- | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| (16) 「これからはちゃんと片づけようね」 ----- | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| 9 『お手伝いを頼んだのに、「いやだなあ」と言って手伝おうとしない時』
(17) 「手伝ってくれると助かるんだけどね」 ----- | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| (18) 「どうしてできないの、もう大きいんでしょ！」 ----- | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| 10 『掃除の時、出しっぱなしのおもちゃをかってに片づけてしまったが、後で子どもがやりかけだのにと不満顔の時』
(19) 「約束の時間には片づけようね」 ----- | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| (20) 「さっさと片づけないでほっておくからでしょ！」 ----- | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |

ありがとうございました。付け落としがないかどうか、見直してください。

思いやりと正義感の発達を規定する家族要因の研究

分担研究者 首 藤 敏 元
(埼玉大学教育学部助教授)

研究要旨 本研究は、家庭内の人間関係と、幼児の思いやりおよび正義感の発達との関連を検討することを目的とした。研究1では、親子間と夫婦間での共感経験から家族関係をとらえ、家族の感情交流が育児場面、会話場面、子どもの愛着行動などの家庭生活の様々な局面と関連することを報告した。そして、それぞれの家庭には感情的な雰囲気が存在し、家族の共感関係を把握することにより、その感情的な風土をとらえ得ることを示した。研究2では、幼児の思いやりと正義感を自己制御された対人行動と見なし、それを保育者の観察を通して測定した。親子の共感関係と親のしつけの態度は、主に幼児の自己抑制的な協調的行動と関連していた。また、男子にとって、父親の共感と自己制御のしつけが重要になることを示した。

■ 研究目的

幼児期の子どもは、自己意識と対人関係の発達とともに、共感、罪障感、優越感、正義感などの複雑な情緒を表出するようになる。このような社会的情緒は、子どもが人との関係の中で社会化し個性化していく上で重要な要素となる。近年、青少年の非行や規範意識の低下、心理的な問題が顕著になり、乳幼児期からの基本的情緒の形成が重要視されてきた。特に、相手の心情を想像し自己の行動を制御しようとする動機づけと能力、相手の気持ちを共有し相手を思いやる心、人の身体や心を傷つけてはいけないといった基礎的な道徳観、利己的な行動を抑制する公正観などを幼児期から育成することの重要性がさまざまな形で強調されている。

思いやりとは、相手の気持ちや欲求を理解し、自分よりも相手を優先させようとする心情や行動である。思いやりには、相手の心情や要求に影響され、自分の欲求を抑え相手の利益になるように振舞う“自己抑制的”な側面と、相手の要求を優先させて相手の利益につながる行動を積極的に表現しようとする“自己主張的”な側面とがある(首藤、1995)。思いやりは無意識的なものではなく、自己によって意識的に制御された行動である。

正義感と公正感とは道徳的概念のひとつである。幼児期には、「ずるい」という表現に代表されるように、他者の利己的な行動に対する反発の形で表出されることが多い。このような素朴ながらも正当な自己主張は、仲間やきょうだいの遊び場面

で見ることができ、幼児に利己的な要求の衝突を解決する機会を提供する。素朴な正当性の主張は、他者とのやりとりを通して、成熟した道徳的概念へと発達していく。

思いやりは自己が他者(集団)に近づく親密化の過程を含むのに対し、正義感とは自己と他者の分離の過程を含んでいる。これら2つの心理的な過程は、仲間同士のいざこざとその解決に見られるように、幼児が他者と協調的な関係を作り上げていく過程で同時に見られるものであり、人間発達の中心的な軸となるものである。

従来から、思いやりの発達には幼少期に思いやりを受ける経験、つまり親から愛される経験と、自分の心情とは異なる他者の心情を代理的に経験する共感経験や視点取得経験が必要条件になることが指摘されてきた。また、子どもの正義感の形成には、子どもの心情を汲み取りながら社会的規範を子どもに提示したり考えさせたりする誘導的しつけが効果的であることが示されてきた。しかし、今までの研究は養育者としての母親のみに焦点を当てており、幼児の思いやりと正義感の発達を母子関係の中でのみ問題にしてきたといえよう。首藤(1997)は、家庭を幼児の思いやりの発達環境としてみた場合、親の性格特性としての共感を問題とするのではなく、母子間と父子間、および夫婦間を含めた家族間での感情交流として共感をとらえる必要性を提案した。そして、家族の共感関係に基づいて、家族関係の質を測定する可能性を検討した。家族の共感関係に関する研究はまだ始まったばかりであり、測定の妥当性の検討や様々な家族要因

表1 家族共感に関する尺度と質問項目

A. 親子間（母子間および父子間）の共感経験

尺度名	α 係数	質問項目
共有	母子間 .749	子どもと気持ちがひとつになっていると感じたことがある。
		泣いている子どもを見て、自分まで悲しくなってきたことがある。
		子どもを叱ったあと、子どもがどんな気持ちになったかを想像したことがある。
		子どもが病気の時つらそうにしているのを見て、自分までつらい気持ちになったことがある。
父子間 .748		子どもが悲しそうにしている時、なんとかしてあげたくなったことがある。
		子どもの話や表情から、子どもの気持ちを感じとろうとしたことがある。
		子どもにプレゼントを買う時、子どもの喜んだ顔を想像しながら選んだことがある。
		子どもの喜んでる様子を見て、自分までうきうきしてきたことがある。
分離	母子間 .667	子どもと言葉やしぐさでやりとりするのが、めんどうになったことがある。
		子どもの気持ちの変化についていけず、子どものことを不思議に感じたことがある。
		子どもが泣いていた時、その気持ちをわかろうとしたが、なぜ泣くほどに悲しいのか理解できなかったことがある。
		子どもが「これはおもしろい」と言葉やしぐさで伝えてきても、自分は興味を持てなかったことがある。
父子間 .668		子どもが何かを恐がっていた時、その気持ちをわかろうとしても、自分までその恐さを感じなかったことがある。

B. 夫婦間（妻から見た夫婦間および夫から見た夫婦間）の共感経験

尺度名	α 係数	質問項目
共有	妻 .782	夫(妻)と気持ちがひとつになっていると感じたことがある。
		夫(妻)がとても疲れているのを見た時、なんとかしてあげたくなったことがある。
		夫(妻)がつらそうにしているのを見た時、自分まで苦しくなったことがある。
		夫(妻)のしぐさや行動から、夫(妻)の気持ちを感じとろうとしたことがある。
		夫(妻)が仕事(仕事や子育て)などでの喜びや感動を話すのを聞いて、自分までハッピーな気持ちになったことがある。
		夫(妻)のプレゼントを買う時、夫(妻)の喜んだ顔を想像しながら選んだことがある。
分離	夫 .749	自分の言動から夫(妻)がどんな気持ちになったかを想像したことがある。
		夫(妻)の気持ちを深く理解しようとしたが、どうしても理解できなかったことがある。
		夫(妻)がつらそうにしていた時、その気持ちを感じとろうとしたが、ピンとこなかったことがある。
		夫(妻)が何かで悩んでいた時、その気持ちをわかろうとしたが、深く理解できなかったことがある。
		夫(妻)の話聞くのがめんどうになったことがある。
		夫(妻)が楽しい気分だった時、楽しくなる気持ちは理解できても、自分は夫(妻)のように楽しくならなかったことがある。

との関連性などをさらに追究することが必要である。

思いやりも正義感も対人関係の中で獲得される。親が単にやさしくすれば思いやりが育つのではなく、逆に厳しく接すれば正義感が獲得されるのでもない。本研究は、家庭内のどのような人間関係が幼児の思いやりと正義感の発達に必要なのかを明らかにしようとする。特に、家族の感情交流としての共感経験を中心に検討を加える。

■ 研究 1

1. 目的

首藤(1997)は、母子間、父子間、夫婦間での感情の交流(共感関係)から家族関係の質を測定し、親としての発達との関連を検討した。母親(妻)の成長感(夫)の成長感では親子関係のよさに関

する要因の影響が強かった。研究1は先行研究の成果を踏まえ、両親の育児感情や子どもの愛着行動など、様々な家族要因と共感関係との関連性を調査し、家族の共感関係に関する知見を広げることが目的とする。これは、家族の共感関係の測定の妥当性を検討することにつながる。

2. 方法

1) 調査協力者

埼玉県大宮市の4つの公立保育所と越谷市の私立幼稚園1園に子どもの通う保護者が調査に協力した。調査用の冊子は母親用と父親用を1セットとし、保育所に300部、幼稚園に300部配付した。回収率は保育所158部(52.7%)、幼稚園175部(58.3%)であった。保育所の場合、月齢42ヶ月以上の幼児を対象に配付し、幼保で幼児の月齢に差が出ないように配慮した。一人親家庭からも回収があったが、今回の分析には含めなかった。

回収のあった家庭の幼児の平均月齢は保育所で62ヶ月、幼稚園で63ヶ月であった。幼保による性別の分布は同質であった。母親の平均年齢は保育所では34.4歳、幼稚園では34.2歳、父親の平均年齢は保育所では36.8歳、幼稚園では36.5歳、平均結婚年数は保育所9.6年、幼稚園8.8年であった。

回答用紙には欠損値があるため、分析の対象者数は回収部数とは一致しない。

2) 調査項目

質問票はフェイスシートに続き、以下の尺度に

関する項目から構成されていた。母親用と父親用の質問票は全く同一の内容であった。

①家族の共感関係

首藤(1997)は、共感経験が、親子間であっても夫婦間であっても、および母親(妻)から見ても父親(夫)から見ても、共有体験と分離体験という2つの因子から構成されることを見出した。この結果に基づき、親子間での共有体験8項目と分離体験5項目の計13項目が親子間共感の項目として用いられた。また、夫婦間での共有体験7項目と分離体

表2 親の育児感情に関する尺度と質問項目

尺度名	α係数	質問項目
充実感	母親 .645	子どもと遊ぶのが楽しい。 子どもの成長する様子をほほえましく思う。 子育てを通して、友だちが増えた。 子育てを通して、自分が成長していると感じる。
	父親 .755	子どもと接していると、何とも表現できない充実感を感じる。 子どもについて夫婦で話し合い、協力することが多くなった。 親になれてよかったと思う。 自分の子どもが一番かわいい。 子育てを通して、自分の親を尊敬できるようになった。
不安感	母親 .790	子どもから解放されたい、子育てを誰かにかわってもらいたいと思う。 よその子どもに比べて自分の子どもは育てにくいと思う。 子どもの相手をすると疲れてくる。
	父親 .695	子どものことがわずらわしくてイライラする。 子どもと接していると、自分の性格が嫌いになる。 しつけのことなどで、どうしてよいかわからなくなることがある。 私には子どもを育てる自信が持てないと感じる。 子どもの悪い面は私のせいだと思う。 子どもがいるために、自分のやりたいことをがまんしている。

表3 子どもの愛着行動に関する尺度と質問項目

尺度名	α係数	質問項目
安定	母親 .700	あなたから絵本を読んでもらったり、遊んでもらったりすることを好む。 怖いときや悲しい時、病気の時やけがをした時には、あなたの側にいたがる。
	父親 .750	あなたと相談して約束(ルール)を決めることができる。 あなたに抱きついたり、おんぶしてもらったりするような、あなたとの体がふれ合う遊びを好む。 あなたのいろいろな行動や物の扱い方をまねる。 絵を見せたり、「こんなこともできるんだ」とやってみせたりして、あなたに認めてもらうことを喜ぶ。 自分で見つけた物や面白いことをあなたに話したがる。 あなたと一緒にいても、一人で遊ぶことが多く、感情をあまり妻に出さない。
不安定 依存	母親 .654	あなたにべったり甘えてきて、赤ん坊のように手のかかることがある。
	父親 .516	あなたがどこへ行く時にも、ついて行きたがる。 自分でできることも、あなたが手伝わなければやろうとしない。 慣れない場所や知らない人の前では、あなたから離れようとする。
不安定 抵抗	母親 .621	いったん機嫌が悪くなると、あなたがなだめてもなかなかおさまらない。
	父親 .606	あなたに叱られた時に、あなたに怒りをぶついたり、反抗したりする。 あなたにしかられるようなことをわざとする。

表4 家庭内コミュニケーションに関する尺度と質問項目

尺度名	α係数	質問項目
家族間	妻 .702	起床時・就寝時のあいさつ(「おはよう」や「おやすみ」など)。あなたは、 外出時・帰宅時のあいさつ(「いってきます」、「いってらっしゃい」、「ただいま」、「おかえりなさい」など)。あなたは、 食事の時のあいさつ(「いただきます」、「ごちそうさま」など)。あなたは、
	夫 .772	食事がおいしい時(「おいしい」、「うまい」など)。あなたは、 手伝ってもらった時(「ありがとう」など)。あなたは、 失敗したり、迷惑をかけた時(「ごめんなさい」など)。あなたは、
夫婦間	妻 .807	一日の出来事について。あなたは夫(妻)に、 世の中のいろいろな出来事について。あなたは夫(妻)と、 子どもの話題について。あなたは夫(妻)に、 心配ごとがある時。あなたは夫(妻)に、
	夫 .791	あなたが体調の悪いときや、気分のすぐれない時。夫(妻)は、 あなたが病気の時。夫(妻)は、 あなたが疲れている時。夫(妻)は、 髪型を変えたり、新しい洋服を着たりした時。夫は、(仕事がうまくいってうれしい時。妻は)

※各質問文には、コミュニケーションの程度もしくは夫(妻)に対する配慮や気づかひの程度に応じた3段階の選択肢が続く。

表5 第一子誕生までの育児経験家庭内コミュニケーションに関する尺度と質問項目

中学高校時代	高校卒業後、 第一子誕生まで	質問項目
母親 .928	母親 .936	抱っこしたことがある。 寝かしつけたことがある。 ミルクをあげたことがある。
父親 .892	父親 .886	おむつを替えたことがある。 一緒に遊んだことがある。

験5項目の計12項目が夫婦間共感の項目として用いられた。各因子に対応した項目の数は原尺度(首藤、1997)での項目数の割合と一致している。回答者は各質問に「全く経験しない」から「いつもある」までの6段階で評定した。具体的な質問項目は表1に示されている。

②親の育児感情

首藤・馬場・鈴木(1993)の育児感情尺度に基づき、育児の喜びや育児を通じた自己の成長感および生活の充実感に関する9項目と、育児不安やストレスに関連した9項目の計18項目が用いられた。「全く感じない」から「いつも感じている」までの4段階評定が用いられた。表2は具体的な質問項目を示している。

③子どもの愛着行動

愛着のQ技法の項目と首藤・利根川(1994)による幼児の愛着スタイル尺度に基づき、安定愛着に関する8項目、不安定抵抗に関する3項目、不安定依存に関する4項目の計15項目が用いられた(表3)。「めったに見られない」から「たいていそうである」までの5段階評定であった。

④家庭内コミュニケーション

共感によって共有された家族の心情は、言葉や態度を通して相手に伝えられることによって、家族の感情交流として機能する。そこで、家族との日常的な会話の程度と夫婦間での心情のやりとりの程度を家庭内コミュニケーションとしてとらえようとした。家族間での会話の程度に関する項目と、夫婦間における自分の気持ちの伝達の程度、および自分の心情に対する相手の気づかひの程度に関する項目の計17項目が設定された。表4は、項目分析の結果残った14項目を示している。それぞれの質問文には、文脈に沿った3段階の選択肢が用意されていた。例えば、質問文「子どもの問題について、あなたは夫(妻)に」-選択肢「ア.ほとんど話さない、イ.時々話す、ウ.毎日のように話す」、質問文「食事がおいしいとき、あなたは『おいしい』と」-選択肢「ア.ほとんど言わない、イ.言ったり言わなかったり、ウ.必ず言う」。

⑤第一子誕生までの育児経験

表5に示されているように、第一子誕生までの